

2-4. 洗足池の景観保全にみる歴史的風致

(1)はじめに

洗足池は、かつては「千束郷の大池」や「千束池」と呼ばれていたが、日蓮宗開祖の日蓮が池畔で手足を洗ったという伝承から「洗足池」と称されるようになった。江戸時代から景勝地として知られ、初代歌川広重の浮世絵に描かれたほか、昭和3年(1928)には川瀬巴水の版画にも題材として取り上げられるなど、時代を超えて芸術家たちに愛された場所である。幕末に訪れた勝海舟がこの地を気に入り、後に別荘を構え、遺言により池畔に墓所が設けられる等、歴史上の人物とのつながりも深く、池周辺には多くの歴史文化資源が点在している。

長い歴史を持つ洗足池は、江戸時代から景勝地として親しまれ、大正・昭和初期には行楽地としても人気を集めた。その価値は早くから認められ、昭和5年(1930)に風致地区に指定され、昭和7年(1932)には東京市八名勝に選定された。

現在、洗足池は区立洗足池公園として整備されており、開放的で美しい水辺と都市部に残る貴重な緑が調和する都市景観を形成している。周囲には緑豊かな住宅地や社寺、勝海舟記念館(旧清明文庫)などが分布し、自然、歴史、文化が揃う複合的な魅力を持つ空間となっている。

洗足池公園を舞台とした伝統行事や環境保全活動は継続的に行われており、特に、昭和8年(1933)に地元名望家により設立された社団法人洗足風致協会(現:(公社)洗足風致協会)は、風致保全と美化活動に長年取り組んでいる。同協会が主催する「ほたるの夕べ」や「春宵の響」といった代表的な催しは、多くの来訪者を呼び寄せるとともに、地域の風致意識の醸成に重要な役割を果たしている。

都市化が進む東京において、洗足池は、その歴史的価値と自然環境の両面で重要性を増している。今後も、この貴重な景観を地域共有の財産として大切に守り、次世代に引き継いでいくことが求められている。

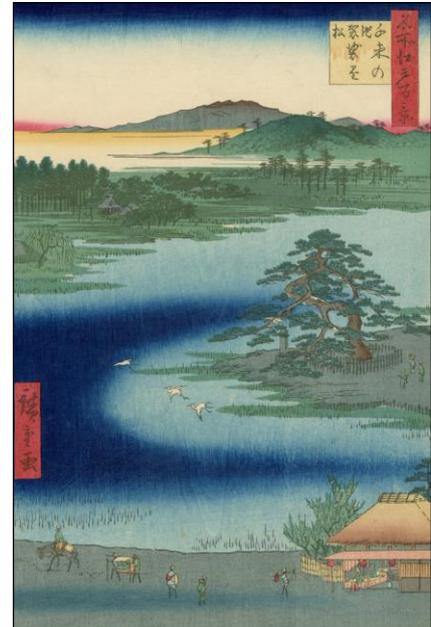


図2-4-1 歌川広重による浮世絵図
「名所江戸百景 千束の池袈裟懸松」



図2-4-2 川瀬巴水「千束池」

(2) 建造物

① 洗足池公園

洗足池公園の総面積は約 77,000 平方メートルであり、そのうち公園内に所在する洗足池の面積は約 41,000 平方メートルである。洗足池の平均水深は約 1.5 メートルであり、園内の中央部を南北に細長く占める形で位置している。したがって、洗足池は公園全体の面積の約 53% を占めていることになる。

洗足池は武蔵野台地の南端にあたる荏原台の谷地部をせき止めることで形成された淡水池であり、かつては灌漑用水として利用されていた経緯をもつ。池の周囲には崖線地形の名残をとどめた樹林地があり、公園の景観に変化を与えている。

洗足池駅周辺の標高は約 21 メートルと大田区内では比較的高い位置にあり、公園全体は緩やかな起伏に富んだ地形を特徴としている。園路は池の周囲を 1.2 キロメートルにわたり巡り、徒歩 20 分程度で一周できるよう整備されている。池の周囲には国の登録有形文化財(建造物)である妙福寺祖師堂(旧七面大明神堂)、池月橋、千束八幡神社、弁天島、水生植物園、桜広場、勝海舟夫妻の墓所、洗足池図書館などの施設や名所が配置されており、池を中心とした景観が構成されている。平成 31 年(2019) 3 月、洗足池公園は大田区内初となる東京都指定の名勝となった。



図 2-4-3 洗足池公園(昭和 41 年(1966))



図 2-4-4 洗足池公園(現在)



図 2-4-5 妙福寺祖師堂(旧七面大明神堂)

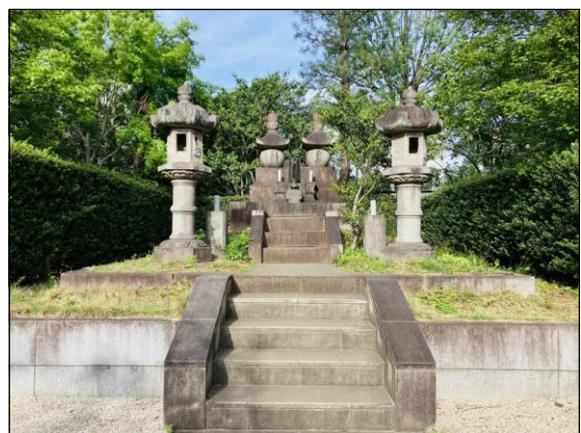


図 2-4-6 勝海舟夫妻の墓所

き届いた園内を歩けば、都会の喧騒を忘れさせる静謐な雰囲気が感じられる。

施設運営の面では、昭和39年(1964)より始まった「洗足池ボート場」の運営を通じて、池の真ん中から公園を360°一望できる特別な体験が提供されている。令和5年度(2023)には約42,500人もの人々がこの体験を楽しんでおり、陸地では得られない、水上からの視点により、洗足池の自然美と歴史的景観を体感している様子が見られる。



図2-4-10 洗足池ボート(昭和45年(1970))



図2-4-11 洗足池公園の資源



図2-4-12 洗足池ボート(令和7年(2025))

環境保全活動の中核を担うのが平成22年(2010)より開始した「ほたる復活プロジェクト」である。このプロジェクトは昭和初期まで生息していたほたるを復活させようとする地域の思いを象徴している。特に、大森第六中学校、NPO、(株)東急電鉄、大田区等の関係者が、環境指標生物であるほたるの復活に向けて、世代や立場を超え、一体となって洗足池の水質改善や景観向上等に尽力する様子からは、都市部に残る水辺と緑豊かな自然環境を皆が大切に思い、そうした貴重な自然環境を後世まで引き継いでいこうとする熱意が感じられる。



図2-4-13 ほたる復活プロジェクト

伝統行事としては、平成7年(1995)から開催されている「春宵の響」では、5月の

満月に近い夜、洗足池公園内にある池月橋を舞台に横笛の澄んだ音色が静寂の中に響き渡る。横笛の音が水面に反射し幾重にも重なりあう様子は、まるで時間が止まったかのような幽玄の世界を作り出している。また、平成15年(2003)から開催されている「洗足池ほたるの夕べ」では、初夏の闇に約3,000匹のほたるの淡い光が浮かび上がり、水面や木々の間を舞う神秘的な光景が広がる。その儂く美しい光の舞いを通して、かつての日本の夏の風情を現代に伝えようとする様が、参加者に自然の大切さを示唆している。



図 2-4-14 春宵の響

これらの多岐にわたる活動を通じて、洗足風致協会による洗足池の景観保全活動の様子が見られ、新たな魅力の継続的な発信と洗足池の自然と歴史に親しむ機会を提供することで、地域への愛着を醸成し、都心にありながらも自然と文化が見事に調和した都会のオアシスとしての居心地の良さが体感できる。

また、平成31年(2019)3月、洗足池公園が大田区内初の東京都指定の名勝となったことを受けて、区は令和3年(2021)に「名勝洗足池公園保存活用計画」を策定した。そして翌年、この計画に基づいて、洗足池の景観を保全するため、行政、地域団体、専門家が連携する仕組みとして「名勝洗足池公園保存活用連絡協議会」(以下「協議会」という。)が組織された。

本協議会では、行政職員、洗足風致協会、地元町会、学識経験者等が一堂に会し、洗足池の保存活用に関する様々な課題について情報共有と意見交換が行われており、江戸時代から地域に愛され続けてきた洗足池公園を将来に引き継いでいこうとする熱意や、この地域の歴史的景観を守り育てようとする多様な関係者の強い結束が感じられる。

令和6年度(2024)までの実績として、公園内の樹木更新計画や公園西側増設地の整備計画について審議が行われ、桜の植え替えや園路整備などの具体的な成果が現れている。また、現在は、名勝公園マネジメント計画の策定に向けて議論が重ねられている。この計画では、行楽地として親しまれてきた洗足池の伝統的な景観体験を重視したシークエンス景観(移動しながら連続的に変化する景観)の整備等による景観保全・向上、植物等を活用した水質の改善、そして水量の確保等による景観保全・向上といった多角的な視点から検討が進められている。

協議会の中では、学識経験者の進行のもと参加者同士の活発な対話が特徴的である。それぞ



図 2-4-15 名勝洗足池公園保存活用連絡協議会の様子

れの立場から洗足池への思いを語り合う声が聞こえ、洗足池公園の歴史的価値や文化的意義についての認識を深める様子が見られる。これらの議論は室内だけでなく、協議会委員が共に洗足池公園を実際に歩きながら、池の水質や周辺の植栽状況などを確認し、現場で具体的な課題や魅力について意見を交わしている。

こうした取組を通じて、都心にありながらも水辺と緑が調和した洗足池周辺では、静けさや季節の移ろいを感じる風景に囲まれ、住民や訪れる人々に安らぎを与える市街地の良好な環境が見られる。

表 2-7-1 洗足池風致協会の主な活動

主な活動名	活動時期				
	～昭和 20 年 (1945)	～昭和 40 年 (1965)	～昭和 60 年 (1985)	～平成 17 年 (2005)	～令和 7 年 (2025)
洗足風致協会設立	S8				→
景観保全と整備	S8				→
環境保全活動	S8				→
弁天島造成	S9●				
「洗足池ボート場」の運営		S39			→
「ほたる復活プロジェクト」					H22 →
「春宵の響」				H7	→
「洗足池ほたるのタベ」				H15	→
「名勝洗足池公園保存活用 連絡協議会」					H31 →

(4)まとめ

洗足池とその周辺地域は、高度に都市化した東京において、江戸時代から浮世絵に描かれてきた優れた自然景観と歴史文化資源が良好に保全された希少な地区である。日蓮の伝承に由来する池の名称、勝海舟夫妻の墓など、歴史的背景を色濃く残している。その歴史的・文化的価値は、平成31年(2019)に東京都の名勝に指定されたことや令和7年度(2025)に(公財)都市づくりパブリックデザインセンターが主催、国土交通省が後援した都市景観大賞の特別賞を受賞したことから、客観的に評価されていることが分かる。

洗足池周辺の景観は、豊かな自然環境と地域住民の日常生活、そして江戸時代から継承されてきた季節の行事や環境保全活動が相互に関連し合うことで形成されている。これらの要素が見事に調和することにより、都心にありながら四季折々の美しさを誇る特別な景観が創出され、東京都内でも稀有な歴史的風致となっている。

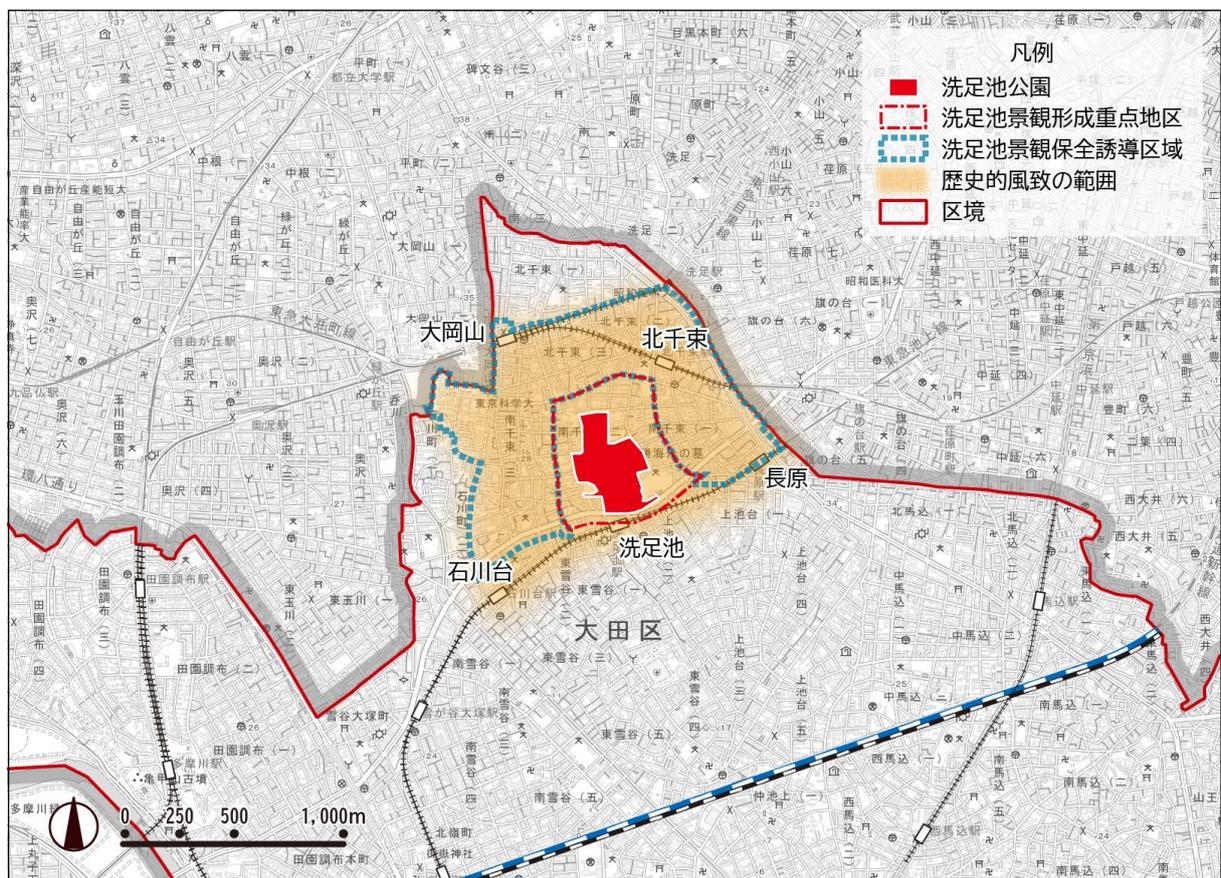


図2-4-16 洗足池の景観保全にみる歴史的風致の範囲

2-5. 大森貝塚にみる歴史的風致

(1)はじめに

大森貝塚は、明治10年(1877)に米国の動物学者エドワード・S・モース博士によって発見された遺跡である。モース博士は腕足類(貝の一種)の収集研究を目的として来日し、同年(1877)6月19日に、明治5年(1872)に開通したばかりのわが国最初の鉄道で横浜から東京へ向かう途中、大森停車場(現:JR大森駅)付近の線路脇に貝殻の堆積を確認した。ハーバード大学在籍時に貝塚発掘の経験があったモース博士は、これを先史時代の貝塚と判断した。

発見から約3か月後の明治10年(1877)9月16日、東京大学で動物学を講じていたモース博士は学生2名と助手を伴って大森貝塚の発掘調査を実施した。この調査で土器片、骨片、土版などの遺物が採集され、その後も複数回の調査が行われた。これらの成果は、明治12年(1879)に学術報告書『Shell Mounds of Omori』として発表された。

この調査と報告書は日本人研究者や知識人に大きな影響を与え、日本における近代考古学研究の基礎となった。明治期の日本は西洋の科学技術や学術方法論を積極的に導入しており、モース博士による大森貝塚の発掘は、科学的手法に基づく考古学を日本に紹介した重要な出来事であった。

発掘以前の日本には「考古学」という学問概念は存在せず、古墳や出土品は「古器旧物」として扱われるにとどまっていた。モース博士の調査で導入された出土遺物の分類・分析方法や発掘調査報告書の刊行は、日本の考古学研究に大きな影響を与えた。

現在、大森は「日本考古学発祥の地」として認識されており、日本考古学の礎が築かれた場所として歴史的に重要な意義を持っている。世界的水準に発展した日本考古学の出発点がここにあったことは、この地の文化的・学術的価値をさらに高めている。

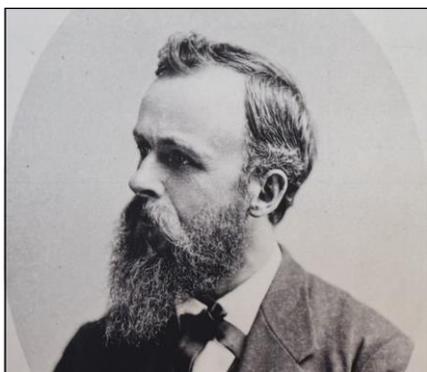


図2-5-1 エドワード・S・モース博士

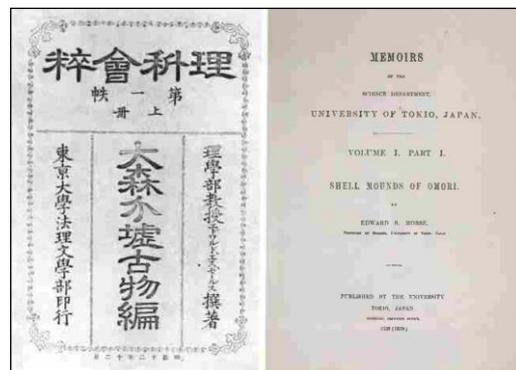


図2-5-2 学術報告書『Shell Mounds of Omori』

(2) 建造物

①大森貝塚¹【国指定の史跡】

大森貝塚は、大田区から品川区にまたがる台地上に位置する縄文時代後期から晩期(約4,000～3,000年前)の遺跡である。この貝塚からは、土器・石器・土版・骨角器等が出土しており、昭和30年(1955)に国指定の史跡となった。

この貝塚の特徴は、層状に堆積した厚い貝層にある。主にハイガイ、ハマグリ、アサリ、シオフキ、スガイなどの貝殻が主体となっており、層ごとに貝の種類や密度が異なることから、当時の人々の食生活や環境変化を読み取ることができる。

貝層には貝殻だけでなく、動物の骨、石器、土器片なども含まれており、縄文人の生活活動を具体的に示す貴重な証拠となっている。地形的には低地の干潟や入江に沿って形成されているのが特徴である。

現在までの発掘調査によって確認された範囲は約1,000平方メートルに及び、厚さ1メートル前後の貝層が観察されている。この規模と保存状態の良さに加え、わが国の考古学・人類学の発祥の地として、学史の上に貴重な価値を有するものであることから、大森貝塚の学術的価値は極めて高く評価されている。



図 2-5-3 大森貝塚(模型)

②大森貝塚碑

大森貝塚碑は、大正14年(1925)に逝去したモース博士の訃報を聞きつけた石川千代松、岩川友太郎、白井米二郎、佐々木忠次郎、松村瞭、宮岡恒次郎ら、21名が発起人となり、大森貝塚の顕彰とモース博士の偉大なる功績を後世に伝えるため、昭和5年(1930)に現在の大田区山王1丁目3番に建てられた記念碑である。

記念碑は仙台石を用いて製作され、高さ約1.8メートル、幅約0.9メートルの石碑に2段構造の台石を設置している。碑面の表側には碑名、英文による説明文及び発起人名が刻銘され、裏側にはモース博士による貝塚発見の経緯と碑が昭和5年(1930)4月に建てられたことが記されている。



図 2-5-4 大森貝塚碑
(建立当時(昭和5年(1930)))



図 2-5-5 大森貝塚碑(現在)

¹ 貝塚とは、食料や貝類の殻を捨て、それが堆積した遺跡。古くは「貝墟」または「介墟」とも書いた。

(3)活動

①東京都大森貝塚保存会の活動

東京都大森貝塚保存会(以下「保存会」という。)は、昭和40年(1965)に地元有志を中心に設立された。発足時の『趣意書(昭和40年(1965)11月27日)』には、次代を背負う夢多き少年少女に保存会の活動を知ってもらいたいという目的が明記されている。保存会は設立から間もない昭和42年(1967)に、大森貝塚に関する、当時入手困難であった調査報告書や論文を収録した『大森貝塚-90周年記念-』を出版するという成果をあげた。

昭和52年(1977)の大森貝塚発掘100周年に向けては、初代会長の西岡秀雄と第2代会長の関俊彦が中心となり、社団法人大森倶楽部の協力を得て積極的な活動を展開した。彼らは周辺の小学校や東京大森ライオンズクラブ、東京大森ロータリークラブでモース博士や大森貝塚に関する講演を精力的に行った。この啓発活動は、後に100周年記念事業における児童による絵画展に結実し、会場には多くの人々が訪れ、大森貝塚の歴史と文化を共に実感する姿が見られた。また、大森駅ホームの記念碑建立資金支援という形でも実を結ぶこととなった。

同じく100周年の節目に、保存会は「大森貝塚墟碑」の見学環境整備にも尽力した。それまで私邸内にあって一般の人々が見学できなかった碑について、日本電信電話公社(現:NTTデータ、以下「電電公社」という。)が隣接地に新社屋を建設する機会を捉え、国・都・区に協力を要請した。電電公社の厚意により、現在の見学通路が整備され、大森貝塚墟碑を見に行くため見学通路に進む人が時々見られる。

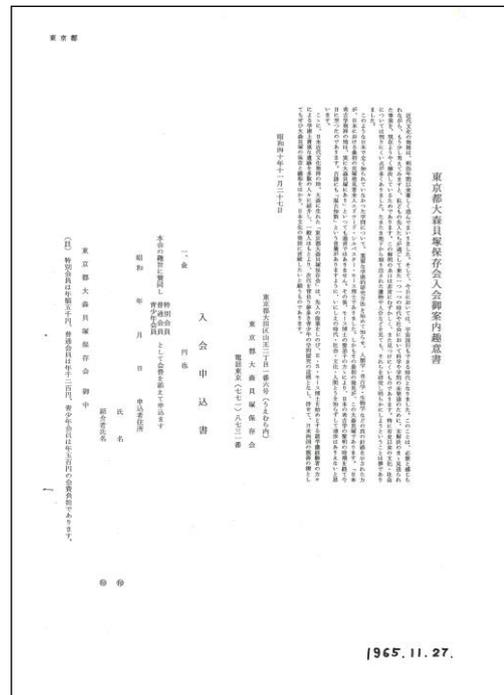


図2-5-6 大森貝塚保存会発足時の『趣意書』



図2-5-7 大森貝塚100周年パレード



図2-5-8 花自動車パレード

さらに保存会は、京成百貨店(現：大森駅前ビル)において、縄文生活を再現した「モース博士と大森貝塚展」を開催するとともに、大田区・品川区の小中学生による「縄文時代をテーマにした図画コンクール」を企画した。地域を巻き込んだ取組として、大田区立山王小学校の鼓笛隊や地元のボーイスカウト・ガールスカウト、交通少年団、東京消防庁音楽隊、地元企業等による花自動車パレードも実施され、多くの市民に大森貝塚の価値を知ってもらう機会となった。これらの活動は『大森貝塚-100周年記念-(昭和55年(1980)3月20日)』としてまとめられ、その後の小学館によるモース関連書籍の刊行にも影響を与えた。

現在、保存会は毎年9月中旬に「日本考古学発祥の地」(大森駅構内)、「大森貝塚の碑」(品川区)の3つの記念碑への献花式典を開催している。この式典には多くの人々が参加し、モース博士への敬意とこの土地の歴史を重んじる人々の姿が見られる。これらの記念碑はいずれも、大森貝塚の歴史的価値を後世に伝える重要なモニュメントとなっている。また、保存会は定期的に講演会やパネル展を開催するとともに、大森貝塚に関する書籍や絵葉書、小冊子の刊行も続けている。保存会の活動は地元の関係団体との連携のもと、文化・歴史に満ちた地域環境の整備や提言にも及んでおり、地域の文化遺産保護における模範的な取り組みとして評価されている。

大森駅を降り立つと、周辺の街並みからは想像できない太古の時代の記憶が、記念碑や案内板を通して浮かび上がる。現在の大森は市街地として発展しているが、貝塚の存在によって、縄文時代にこの地域が東京湾に近接し、海の恵みを生活の糧としていた人々の暮らしがあったことを伝える歴史的景観が感じられる。特に大森駅構内に設置された「日本考古学発祥の地」の碑は、通勤・通学の人々が行き交う日常空間に歴史的な奥行きを与え、地域の名称「大森」と貝塚の関係を静かに語りかける存在感がある。都市化によって失われがちな土地の記憶が、駅という公共空間の中に巧みに埋め込まれることで、地域の独自性を保つ景観要素となっている様子が見られる。また、周辺の商店街や住宅地からわずかに離れた場所に保存されている貝塚跡は、喧騒から一步離れた歴史的空間として、現代の街並みの中に古代からの歴史を感じられる場となっている。

大森貝塚の存在によって、大森という地域は単なる東京の住宅地・商業地ではなく、縄文時代から現代まで連なる時間の流れを内包した独特の風情を醸し出している景観が感じられる。



図 2-5-9 「日本考古学発祥の地」の碑 (昭和52年(1977)撮影)

表 2-5-1 東京都大森貝塚保存会の主な活動

主な活動名	活動時期				
	～昭和 20 年 (1945)	～昭和 40 年 (1965)	～昭和 60 年 (1985)	～平成 17 年 (2005)	～令和 7 年 (2025)
大森貝塚碑の設置	S5●				
東京都大森貝塚保存会の発足		S40●			
90 周年記念事業(準備期間含)		S40	➡ S42		
大森貝塚に関する講演		S40	➡		
100 周年記念事業(準備期間含) (記念誌絵画、パレード等)		S42	➡ S52		
記念碑に対する献花式典		S40	➡		
友誼団体との交流 モース研究会			S52	➡	

(4)まとめ

大森貝塚という国指定の史跡である縄文時代の遺跡と、その学術的・歴史的価値を守り伝える東京都大森貝塚保存会の活動が一体となり、都市部に残る縄文時代の文化遺産として景観を形成し、地域の人々と遺跡の共存により育まれてきたこの地域特有の歴史的風致となっている。

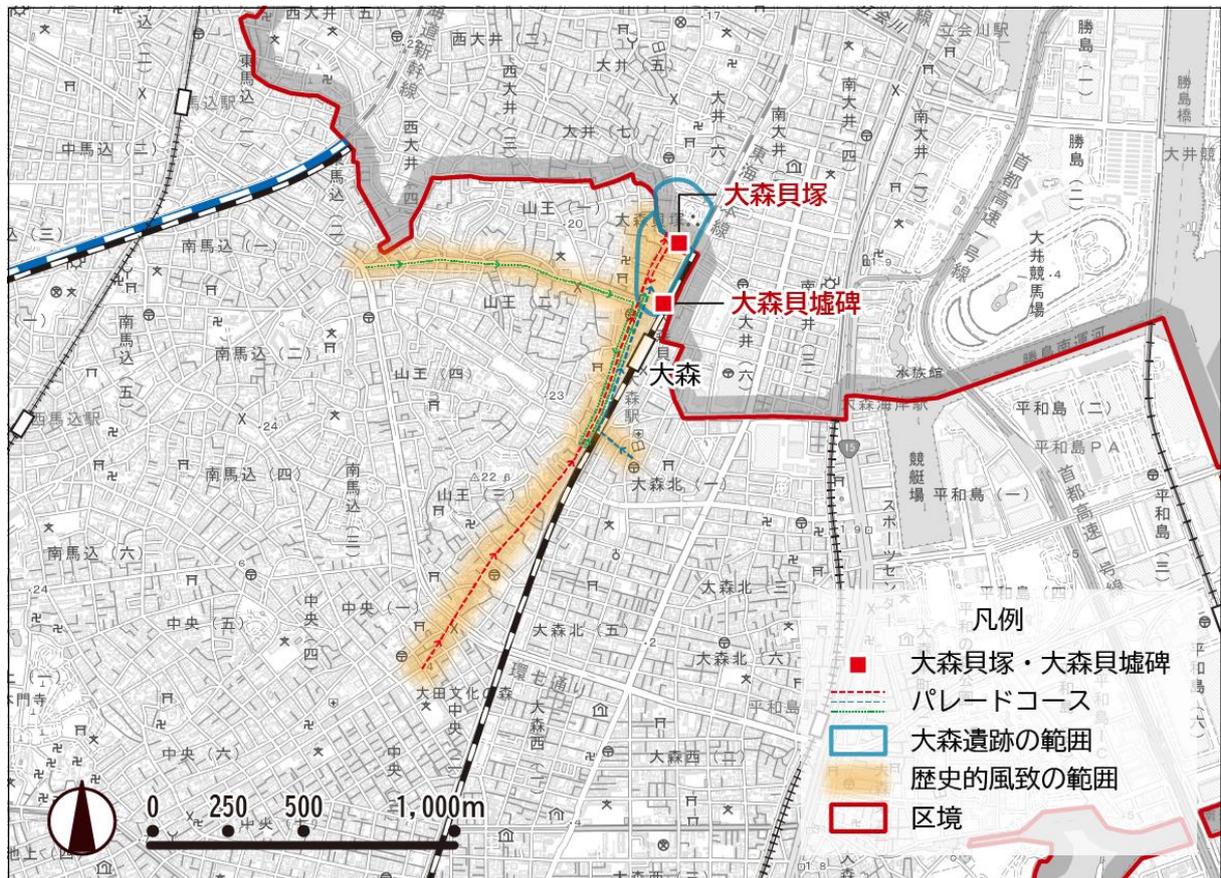


図 2-5-10 大森貝塚にみる歴史的風致の範囲

2-6. 海苔のふるさとにみる歴史的風致

(1)はじめに

かつて大田区は海苔の産地として名高く、味・量ともに全国一を誇っており、江戸時代から長きにわたり人々の暮らしと地域経済を支えてきた。漁業権の放棄により昭和38年(1963)春に海苔養殖の歴史は幕を閉じたものの、現在でも区内には多くの海苔問屋が残り、海苔の流通の拠点となっているほか、長年の経験と鑑識眼を備えた問屋が選び抜いた海苔が全国に販売され、大勢の人々の食卓を彩っている。

①区における海苔の歴史

区における海苔の歴史の始まりは、今から300年以上前の江戸時代に遡る。当初、海辺の農村の冬期の副業として開始された海苔の養殖は、効率的な農閑余業としての価値を高めていった。延享3年(1746)には海苔の運上永(営業税)が賦課されていた記録があることから、享保年間(1716-1735)には海苔の養殖業が確立していたと考えられている。江戸時代に海苔養殖を行えたのは幕府が認めた地域のみであり、東京内湾では大森から品川にかけての沿岸部だけであった。海苔の生育には、適度な潮の干満、遠浅で波静かな海面、栄養分を多量に含む汽水域が最適であるといわれるが、大森・品川の沿岸はこれらの条件を満たしており、「御膳海苔」として将軍家や徳川御三家に献上されるほど品質の良い海苔が採れた。

海苔の養殖は「ヒビ」と呼ばれる籠朶木を浅瀬に建てて、海水に浮遊している海苔の胞子をそこに付着させ、葉状に成長したものから採取を行う。かつては海辺に漂う海苔を「藻取り」する方法が主流であったが、養殖の方法が確立されたことで確実に大量に海苔を採取することができるようになった。これにより大森・品川の沿岸は海苔の一大産地となった。明治から昭和初期には最盛期を迎え、『海苔の歴史(昭和



図2-6-1 江戸時代の海苔養殖風景
「名所江戸百景 南品川鮫洲海岸」
(歌川広重)(安政4年(1857))

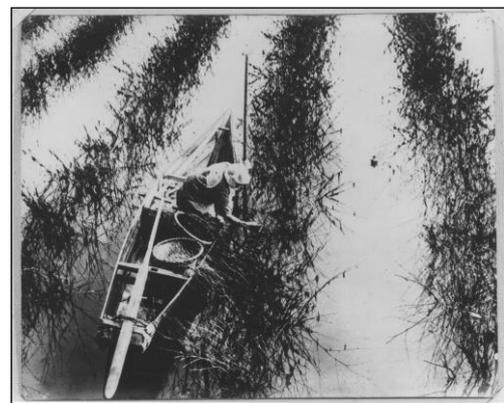


図2-6-2 タケヒビからの海苔取り
(昭和15年(1940))

45年(1970)』によると、昭和24年(1949)の大森村(現：大森地域沿岸部周辺)における採藻人数は3,700人を超えたが、東京都沿岸部の埋め立て計画などに応じるため、昭和37年(1962)に漁業権の放棄が決定し、昭和38年(1963)春に大田区における海苔養殖はその歴史に幕を閉じた。

海苔養殖の終業により役目を終えた海苔生産の用具は処分が始まり、歴史ある海苔生産用具は消滅の危機に瀕した。そこで大森の有志は、地域を支えた海苔養殖の歴史を後世に伝えることを目的に、昭和39年(1964)に「大森海苔漁業資材保存会」を立ち上げ、生産用具の収集を進めた。同保存会は集まった資料の保存・展示を行う施設の設立を求め、区はこれに応じて昭和42年(1967)に当時大森にあった大田教育センター内に「郷土資料室」(大田区立郷土博物館の前身)を開設し、海苔の生産関係資料を中心に展示を行った。これらの海苔生産用具一式は、平成5年(1993)に重要有形民俗文化財「大森及び周辺地域の海苔生産用具」に指定され、平成11年(1999)に海苔船が2点追加された。また、区は平成20年(2008)に「大森 海苔のふるさと館」を平和の森公園内に開設し、重要有形民俗文化財を含む約150点を常設展示している。



図2-6-3 海苔生産用具(ヒビ・竹割り・鋤等)

②大森本場乾海苔問屋協同組合の結成

大森本場乾海苔問屋協同組合は、海苔の流通を担う乾海苔問屋の集まりである。組合の基礎となったのは、明治18年(1885)頃に大森村の卸売や仲買をする乾海苔営業者で組織された「本場乾海苔商組合」であり、粗製濫造品に注意することや販売する海苔の規格を統一することを目的とした。

明治19年(1886)には、「本場乾海苔商組合」を継承した「大森本場乾海苔商組合」が結成され、昭和22年(1947)に品川・糀谷・羽田の各海苔問屋と合同して「大森本場乾海苔問屋組合」に改組し、昭和27年(1952)の協同組合法により現在の「大森本場乾海苔問屋協同組合」となった。組合の名称に「本場」を用いることができるのは大森のみであり、これは明治期に東京府から許可を受けたものである。

昭和38年(1963)春の海苔養殖終業により、東京都の沿岸部で生産された海苔を買い付けられなくなった大手の海苔問屋は自ら全国の生産地に出向くことがあったが、小口の買い付けを行う小規模問屋はこの対応が困難であった。そこで、大森本場乾海苔問屋協同組合は入札場と事務所を備えた「大森海苔会館」を建設した。これにより、組合に加盟する小規模問屋は海苔の買い付けを継続することができるようになったことで、海苔の養殖が終業した現在でも大田区は海苔の流通の中心となり、全国各地に向けて販売・取引を行っている。

(2) 建造物

① 大森海苔会館

昭和 37 年(1962)10 月に建設された、大森本場乾海苔問屋協同組合の事務所と海苔の入札場を備えた会館である。

建設当初は、鉄筋コンクリート造の 3 階建てであったが、昭和 48 年(1973)6 月に 4 階建てに増築された。1 階は事務所及び入札場、2 階は会議室等、3 階・4 階は倉庫となっている。



図 2-6-4 大森海苔会館
(昭和 37 年(1962)10 月)

表 2-6-1 大森海苔組合加盟店 (大田区内のみ)

空欄：一般店舗 ①：通信販売店舗 ②：業務用店舗(一般客購入不可)		所在地	空欄：一般店舗 ①：通信販売店舗 ②：業務用店舗(一般客購入不可)		所在地
加盟店 (大田区内のみ掲載)			加盟店 (大田区内のみ掲載)		
(株)朝倉海苔店		東馬込	(株)原海苔店		大森中
岩波海苔店		大森東	海苔の松尾		大森東
(株)上原海苔店		上池台	(有)まるりょう伊藤海苔店		大森中
(有)大橋新蔵商店		大森東	(株)守半海苔店		大森北
(有)大橋昌治商店		西糀谷	(株)守半本店※2	①	大森北
大森水産(株)		大森東	(株)茂利半	②	大森北
(株)金子海苔店		大森東	(株)東京蒲田守半		西蒲田
(株)川島屋	①	大森本町	(株)守矢武夫商店		大森東
(株)久保井海苔店		大森東	矢澤海苔(株)		大森西
(株)小林海苔店		多摩川	(株)横山安五郎商店		羽田
(株)五味商店	①	大森本町	(株)吉田商店		大森南
(有)ヤマサ島田商店	①	大森南	米忠海苔店		池上
(有)下金海苔店		大森東	(株)藤森商店		大森中
(株)立石商店		大森中	(株)日達海苔店		西馬込
(株)並木海苔店		大森西	(株)丸由海苔店		大森東
(株)濱富海苔		大森北	(有)丸治海苔店		仲池上
(株)濱貴商事		大森中	(株)イトウネン		大森北
濱口海苔店		大森中	進藤海苔店		山王

※1：建築年、創業年は、大森海苔組合調べ。

※2：(株)守半海苔店の取次店として営業している。

(3)活動

①海苔の入札会

大森本場乾海苔問屋協同組合の入札の仕方は極めて特徴的である。一般的には地域ごとの漁業協同組合連合会の検査員が海苔の品質を見立てて等級をつけたあとに問屋の入札が行われるが、大森本場乾海苔問屋協同組合の場合は等級検査を行わず、試食による「味利き」と、海苔の光沢や色、香りから品質を判断する「目利き」の力で値段がつけられ、競り落とされる。このため、問屋の海苔を見る実力が試される「日本一難しい入札会」といわれている。

また、入札にあたっては、問屋が紙に入札単価を記入して買い付けたい海苔の箱に入れ、同組合の理事らによる開票で落札者が決定する。この方法は戦前から採用されており、現在に至るまで変わらずこの入札が行われている。

入札会は毎年12月から翌年3～4月までの間に毎週1回行われ、入札会の前日には会館の前にトラックが次々と到着し、各地で生産された山積み的大海苔が入札場に運び込まれる様子が見られる。会館付近には入札に参加する海苔問屋関係者の車が並び、その活気を感じられる。

②海苔の販売

海苔の養殖が終業してから60年以上経つ現在でも、大森周辺を中心に数多くの海苔問屋が営業している。特に11月末頃から12月に採取・製造された「新海苔」が販売される時期には、多くの店舗に「新海苔入荷」の張り紙が掲示され、冬の訪れとともに海苔の旬の始まりを知ることができる。特に、老舗の海苔問屋である「海苔の松尾」は、寛文9年(1669)の創業から現在に至るまで海苔の販売を続けており、歴代の店主によって厳選された一級品の海苔が、大森地域のみならず全国の食卓を彩っている。

海苔問屋によって扱う海苔の風味が少しずつ異なり、地域住民はそれぞれの好みに合う海苔を求めて店を訪れる姿から、暮らしに根付いた食の伝統と、店と地域住民のつながりを感じる



図2-6-5 入札会の様子
(昭和44年(1969)2月)



図2-6-6 店先に張り出される「新海苔入荷」の張り紙



図2-6-7 海苔の松尾(店舗)(昭和初期)

ことができる。

(4)まとめ

かつて大森周辺で盛んに行われていた海苔の養殖は移り行く時代の中でその姿を消したものの、海苔の流通・販売は受け継がれている。熟練した問屋により守られた品質と味わいは、区内にとどまらず全国に届けられ、各地の人々の食事に香りとうまみを加えている。海苔のシーズン中に見られるトラックの往来や、数多く残る海苔問屋に掲げられる新海苔入荷の知らせが、今もなお海苔の流通拠点としてその名が知られる地域の歴史的風致を形作っている。

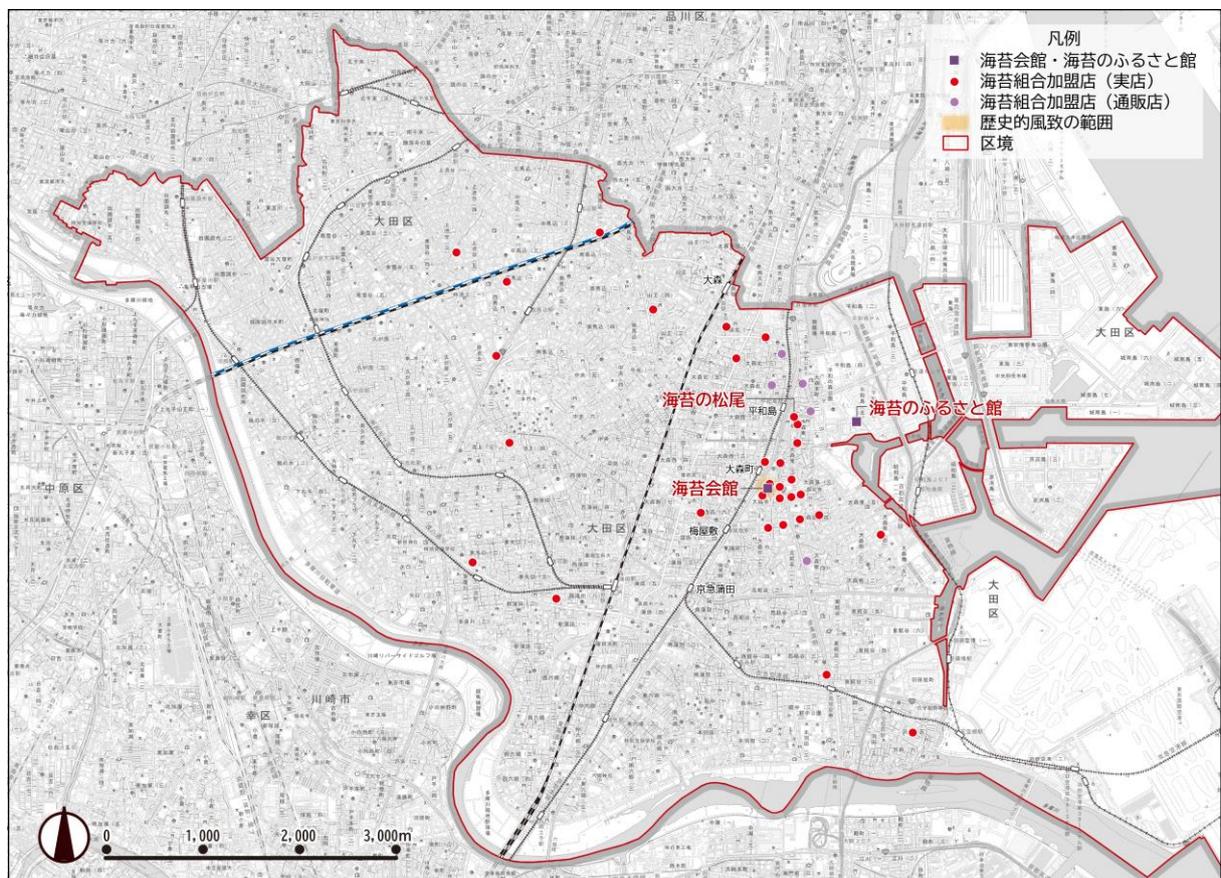


図 2-6-8 海苔のふるさとにみる歴史的風致の範囲



コラム

大森本場乾海苔問屋協同組合の取組

大森本場乾海苔問屋協同組合は、現在、海苔の入札等のほかに、海苔の普及活動等を行っている。

海苔の日である2月6日前後に、区内の小中学校に焼海苔を提供したり、海苔の歴史を紹介した冊子を配布したりしている。また、海苔摘み体験や海苔問屋による直売会を実施するなど、大田区の誇りであった海苔養殖の歴史・文化を次世代に継承する取組を行っている。

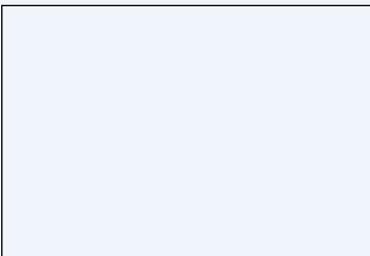


図 2-6-9 海苔の歴史を紹介した冊子

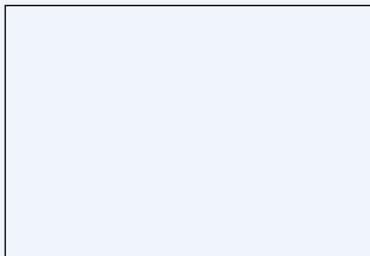


図 2-6-10 海苔摘み体験

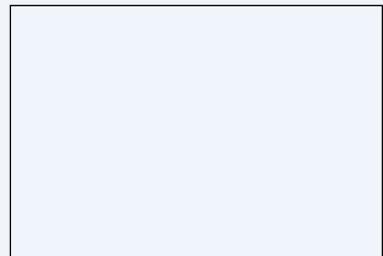


図 2-6-11 海苔問屋での直売会

2-7. 馬込文士村にみる歴史的風致

(1)はじめに

大正末期から昭和初期にかけて、馬込・山王・中央周辺の地域(大森駅西側)一帯では、尾崎士郎、宇野千代、萩原朔太郎、室生犀星、山本有三、川端康成などの作家や、川端龍子、小林古径、川瀬巴水、熊谷恒子などの芸術家が文芸活動の拠点として暮らし、のちに「馬込文士村」として知られる文化的な地域コミュニティが形成され、地域に独自の知的・文化的風土をもたらした。現在でも、日本画の巨匠として知られる川端龍子の旧宅と画室が龍子公園内に現存しているほか、川端龍子が自身の代表作を展示・公開するために自ら設計した龍子記念館、尾崎士郎の旧宅を復元した尾崎士郎記念館、熊谷恒子の自宅を改装して開館した熊谷恒子記念館などから、文士たちのかつての暮らしぶりをうかがうことができる。

馬込文士村の存在は地域住民の郷土への親しみを増す一端を担っており、なかでもかつて区内中学校の教師を務めていた野村裕による文士村の探訪は、のちにレリーフや案内板の設置、散策マップの作成につながり、現在でも地域の個性を形作る重要な要素となっている。

①馬込文士村成立の背景

馬込文士村成立の背景には、大正初めに大森在住の芸術家グループが結成され、山王に開業した望翠楼ホテルを会場に「木原会」と称する展覧会を開催するなど芸術的環境が整いつつあったことや、大正12年(1923)に発生した関東大震災による東京市内の被災や混乱をきっかけに、被害が少なかった大田区内に多くの人々が市内から移住してきたことなどが挙げられる。当時のこの地域は地価が比較的安く、緑豊かで静かな環境であったことから、若い作家・芸術家たちにとって創作に適した地域であったことがうかがえる。

特に多くの作家・芸術家たちがこの地域に住むようになったのは、新進作家であった尾崎士郎が、文学上の先輩であった劇作家・上泉秀信の勧めにより馬込の農家の納屋を買い宇野千代との新婚生活のために転居したことを契機とする。自身も文士村に移住した榊山潤の『馬込文士村』に、尾崎士郎が「一杯やると誰彼の差別なく」馬込へ移住するよう勧誘したとあるように、尾崎はこの地域を気に入り、次々に仲間を誘い、多くの文士たちがこの地へ移住した。尾崎は馬込・山王周辺で転居をし、その後品川区、静岡県伊東市へ移り住んだが、



図 2-7-1 馬込文士村の風景
(昭和 47 年(1972))

昭和 29 年(1954)に再び山王に居を定め、昭和 39 年(1964)に亡くなるまでここで過ごした。この旧居は平成 20 年(2008)に改修、尾崎士郎記念館として整備され、複製の原稿や愛用品が展示されている。

表 2-7-1 馬込文士村で活動していた主な作家とその時期

作家	職業	明治 1910												大正												1920												昭和 1930												1940																							
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12												
片山 広子	歌人 翻訳家	38 大森社会教育会 41 結核												4 雑誌「戦後」												10 雑誌「タンゴ・キイ音楽全集」19-14 芥川・電報館らを知る												10 心の軌行部に従軍																																			
川端 龍子	画家	41 文展入選 42 入新井村新井邸に住む												4 博覧会を組織 7 「大森八景」9 大森山王邸下に住む 画家を新編												15 「雨を聞く」 4 青龍社設立												12 第 7 回画展「嵐城を征く」												14 海軍美術家会																							
真野 紀太郎	画家	39 水彩画研究会設立 45 馬込に住む												2 日本水彩画会をおこす																																																											
和辻 哲郎	哲学者 倫理学者	43 戯曲「常盤」45 東京大学文学部卒業 2 「徳川徳川」7 「徳川再興」9 「日本古代文化」												14 京都府大講義 2 「南陽仙伝の美談哲学」												9 「人間の学として」の倫理学 13 「孔子」												9 東京大学大学院 10 「博士」12 「西とペルシア」																																			
小林 古径	画家	40 第一回文展に「蘭草」を出品												4 大森新井邸に住む												8 大森山王邸の画家仲間に入社												3 「鶴と七曲高」 6 「製」												9 高室に隣接する住居新築、移転												15 「不動」											
日夏 耿之介	詩人 英文学者	45 戯曲「美の瀧」												3 早大英文科卒業												6 大森山王邸に住む 9 自然ちと詩話会を設立 12 「ワイルド詩集」												3 「真明集」												9 高室に隣接する住居新築、移転												13 翻訳「西遊記」											
佐藤 朝山	木彫家	39 上京山崎朝山に就師												3 再興日本美術院第 1 回展「朝山」8 結婚 馬込に住む												13 無題 15 第 1 回展「晴中」												10 第 1 回美術協会展												15 「和3」																							
村岡 花子	翻訳家 童話作家	佐佐木信綱門下で和歌を学ぶ												3 東洋美術と女子美術科卒業 3 戯曲「さくら貝」												8 結婚 大森や新井邸に住む												15 「鶴と七曲高」												7-16 ラジオで子供のニュース番組を担当												戦時中「アン・オブ」											
倉田 百三	小説家 劇作家	43 一高入学												2 劇団「かき」 5 戯曲「出雲とその弟子」 9 上京 大森へ移る 12 有島武郎と「静思」 論争												4 「真相肯定の生活・文壇」												9 「大森時代の精神論的展開」13 「田舎への愛と哀愁」												14 「日本主義文化」																							
室伏 高信	小説家 評論家	明治大学法学部中退												「改造」特派員として活躍												9 雑誌「改造」												5 病院院長																																			
稲垣 足穂	小説家	3 関西学院普通科入学												8 上京 自給自足農場を築く 12 「一歩一歩」												15 「星を売る店」3 「天竺増行伝」7 「うしろ髪」												11 文芸春秋入社												11 雑誌「改造」																							
宇野 千代	小説家	3 岩国高等女子学校卒業												6 上京 8 結婚												10 豊島小塚へ移る 13 「幸福」14 「白い車と赤い」												8 「大人の輪」9 豊島町に別荘 11 スタイル社設立												15 「女の心」																							
尾崎 士郎	小説家	6 早大文学部入学												10 豊島小塚へ移る 12 「馬場」												2 「田舎の生活」4 原田「田舎」												8 「人生劇場・青春集」11 山王に転居 13 雑誌「改造」												15 「女の心」																							
衣巻 省三	詩人 小説家	3 関西学院普通科入学												佐藤春夫の門下に入る												13 「春のさきどり」 3 「こわれたる」												13 第一回詩刊「青龍社」																																			
子母沢 寛	小説家	44 明治大学法学部入学												4 新聞社など職につく 7 読者新聞社入社												12 大森新井邸に住む												3 「成敗物語」 新編開始 9 「笑つてけし」11 新井邸から山王に移転												15 「大森」																							
広津 柳浪	小説家	42 「開明」44 「楽」												43 「楽」												12 大森新井邸に住む												3 「成敗物語」 新編開始 9 「笑つてけし」11 新井邸から山王に移転												15 「大森」																							
藤浦 洸	詩人	42 「開明」44 「楽」												43 「楽」												12 大森新井邸に住む												3 「成敗物語」 新編開始 9 「笑つてけし」11 新井邸から山王に移転												15 「大森」																							
石坂 洋次郎	小説家	8 早大文学部入学												13 大森新井邸へ移る 15 横田高女に転居												7 「金魚」 9 「石坂洋次郎の断片」 13 教員退職 14 上京 「大森」												15 「大森」																																			
今井 達夫	小説家	45 西戸部に転居												4 商業学校を退校												12 豊島小塚へ移る 13 馬込に住む												5 「空想小説」7 結婚												8 読者新聞社入社																							
榊 山潤	小説家	45 西戸部に転居												4 商業学校を退校												12 豊島小塚へ移る 13 馬込に住む												5 「空想小説」7 結婚												8 読者新聞社入社																							
吉屋 信子	小説家	5 「花柳」連載												9 「花柳」連載												9 「花柳」連載												9 「花柳」連載												9 「花柳」連載																							
間宮 茂輔	小説家	7 慶大中退												嵐山、灯台守など職につく												14 馬込に住む												4 「ゆちゆち」												11 「菊」13 「笑つてけし」15 「花柳」																							
川瀬 巴水	画家	43 鎌木湾方に入門												7 初回画展「川瀬巴水」10 「東京十二景」												5 新井邸に住む 4 「旅みやげ第三集」												5 馬込に住む 5 「東京二十景」												11 「日本風景草紙」																							
萩原 朔太郎	詩人	40 第五高等学校入学												2 白萩、星屋に師事 8 「月に吠える」												11 「新小説」14 「詩集」												5 馬込に住む 9 個人出版「空想小説」												13 「日本の朝顔」																							
広津 和郎	小説家 評論家	42 早大文学部入学												5 「怒れるトルストイ」9 「作家的思想」12 「雨」												15 馬込に住む 33 歳で死去 5 「雨」12 「雨」												12 「真実の命」15 「花柳」																																			
吉田 甲子太郎	児童文学者 翻訳家	2 立教中学校卒業												7 早大文学部卒業												11 教員を務める												15 大森山王邸に住む												7 明治大学教員に就任																							
北原 白秋	歌人 詩人	41 「風」44 行状小伝												4 歌集「母恋」7 「赤い鳥」												11 馬込に住む												6 「白萩の断片」9 歌集「鳥」												13 「日本の朝顔」																							
三好 達治	詩人 翻訳家	7 大森新井邸に転居												11 第三高等学校入学												2 大森新井邸に転居 4 結婚 「巴里の愛慕」												9 「花柳」												10 「山嵐集」																							
川端 茅舎	俳人	4 「ホトギス」に初掲載												10 岸田氏の門下生となる												9 大森へ移る												6 「鳥」6 入院												8 「花柳」																							
川端 康成	小説家	46 大阪府立中央中学校入学												6 中学卒業 7 伊豆旅行												9 一高卒業 東京帝国大学入学												13 大学卒業 15 「伊豆の舞」												4 「伊豆」																							
室生 犀星	詩人 小説家	42 三田新聞に転居												2 雑誌「文壇」												14 馬込に住む												3 大森山王邸に転居 7 馬込に家を新築												10 「日本の朝顔」13 「日本の朝顔」																							
伊東 深木	画家	44 鎌木湾方に入門 2 「無花果の園」5 初木版画 「緑」制作												11 「雨」13 「雨」												2 「静かなる」												5 大森山王邸に転居 9 第 1 回画展「静思」												14 青年会会長																							
高見 順	小説家	13 一高入学												2 東京帝大文学部入学												8 「静思」												10 結婚 大森へ移る												12 「手紙」																							
牧野 信一	小説家	3 早大文学部入学												8 早大文学部卒業 10 時事新聞社入社												13 「父を売る子」												5 結婚 大森へ移る												9 「静思」																							
城 左門	詩人 小説家	12 日暮												13 「父を売る子」												3 「静かなる」												10 「静思」												11 「静思」																							
竹村 俊郎	詩人	3 山形中学校を卒業 6 「雲の上の嵐」												9 家を新築												14 結婚												3 「若き者の詩」												6 馬込に家を新築																							
山本 周五郎	小説家	3 山形中学校を卒業 6 「雲の上の嵐」												9 家を新築												14 結婚												3 「若き者の詩」												6 馬込に家を新築																							
佐多 稲子	小説家	4 小学校卒業をやめぬに出る												3 「キキメタル工場から」7 時事新聞社入社												11 「静思」												13 「静思」																																			
真船 豊	劇作家 小説家	4 早稲田大学入学												12 早大文学部卒業												2 「静思」												7 結婚 大森へ移る												13 「静思」																							
添田 さつき	小説家 作詞家	5 日本大学中退												7 「東京節」を制作しヒット												13 「東京節」												9 大森山王邸に住む												14 「静思」																							
熊谷 恒子	書道家	3 結婚 東京へ転居												8 東京帝大文学部卒業												11 馬込に住む																																															
小島 政二郎	小説家	45 早大文学部入学												5 「静思」												11 結婚												13 「静思」												12 大森新井邸に住む																							
佐藤 惣之助	詩人	44 結婚												1 「テラコッタ」制作												5 「静思」												9 「静思」												11 「静思」																							
山本 有三	劇作家 小説家	42 一高入学												3 結婚 「未来派と結婚」												6 早大文学部卒業												12 大森新井邸に住む												15 「静思」																							

また、同じく馬込文士村に住んだ詩人・小説家である室生犀星の旧宅に、昭和8年(1933)に建てられた離れが、地域の要望で馬込第三小学校内に移築されている。



(2) 建造物

①旧川端龍子邸【国登録有形文化財(建造物)】

日本画家・川端龍子が自ら設計した旧宅と画室は龍子公園内に当時のまま保存されており、令和6年(2024)3月に国登録有形文化財(建造物)となった。

敷地中央に主屋及び中門、仏間棟、持仏堂が東西に並び、その北側に画室が配置されている。

主屋は平屋建、切妻造、棧瓦葺であり、その東に延びる中門は、切妻造、棧瓦葺である。主屋の外壁の腰壁は竹の木賊張り、主要室の内壁は大壁として天井周辺まで塗廻すなど、川端龍子の嗜好が反映されている。

仏間棟は主屋の西に接続する平屋建一部2階建の棧瓦葺。1階は仏間の北東に控えの間に配置されており、2階は寝室が1室配されている。仏間棟の西には、コンクリートブロック造の切妻造、妻入、棧瓦葺の持仏堂がある。持仏堂の内部は1室で、西に祭壇、北と南の各1か所に尖頭アーチ窓が開けられ、上部は尖頭のヴォールト天井となっているなど、西洋風とも思える凝った意匠となっている。

敷地の北東に位置する画室は平屋建、切妻造、銅板葺で、南西には土庇が設けられている。天井は高さ4メートル、内部は60畳もの広さがある板敷の1室で、外周は大判ガラスの引戸が用いられ、開放的な画室となっている。高床になっており、床下や壁、軒裏などに竹が使用されているのが特徴である。

②龍子記念館【国登録有形文化財(建造物)】

川端龍子の文化勲章受章と喜寿を記念し、自身の作品を後世に残して多くの人に鑑賞してもらうために昭和38年(1963)に建設された記念館である。龍子自身が設計を行っており、令和6年(2024)3月に国登録有形文化財(建造物)となった。



図 2-7-2 旧川端龍子邸(主屋)の外観



図 2-7-3 持仏堂



図 2-7-4 画室



図 2-7-5 龍子記念館

2階建てで、1階は床を高くしたピロティ構造、2階は展示室となっている。豪快な性格であったといわれる龍子は、作品を楽しんでもらえるなら、光で絵が多少傷んでもまた書けばいい、という考えのもと、2階部分は大きな窓が並び、当時は自然光で作品を鑑賞できる構造であった。現在は、作品を傷めないように窓をふさぐなど厳重な保護を行っている。

川端龍子の本名である「昇太郎」や、雅号の「龍子」から連想される「龍」や「昇り龍」にちなんで、記念館は随所に龍をイメージさせる意匠が配されている。屋根の上には龍舌蘭の彫刻が飾られ、アトリエに続く石畳はウロコ状となっており、記念館自体も上から見るとタツノオトシゴの形をしている。

(3)活動

①馬込文士村を支える人たち

現在では全国的に知られている馬込文士村であるが、当初から広く認知されていたわけではない。その存在や魅力が広まるきっかけとなったのは、当時区立中学校の教師であり、馬込で長く暮らした野村裕が馬込文士村の探訪を始めたことにある。

平成3年(1991)6月11日に産経新聞の東京みなみ版に掲載された野村に関する記事や、野村の著書『馬込文士村の作家たち(昭和59年(1984))』によると、昭和23年(1948)、「馬込の文士」をテーマとした展示を生徒とともに行ったのを機に、馬込文士村について多くの人に知ってもらい、より一層郷土愛を持ってもらいたいという思いから、かつてこの地域に住んだ尾崎士郎や宇野千代などの文士たちが住んでいた住所を調べ、そこを訪れて旧居を確認したり、近隣に住む文士にゆかりのある人物に聞き込みを行ったりするなどして、生い立ちや馬込文士村に住んでいたころの様子を書き記す活動を始めた。この探訪は、教師として多忙な業務の合間を縫って行われたもので、30年近くの時間を要した地道な作業であったが、開発などによって街が日々姿を変えるなか、かつての馬込が消える前に資料として残したい、という野村の強い意志のもと取り組まれた。

昭和50年(1975)に、野村が校長を務めていた大田区立馬込東中学校の文化祭においてPTAコーナーで探訪結果を展示し、これを見たローカル新聞の発行者が記事に取り上げたことや、NHKのラジオで放送されたことを契機に、地域住民のまなざしが馬込文士村に向けられるようになり、馬込文士村周辺を訪れる人の姿が見られるようになった。

昭和58年(1983)には、探訪の集大成ともいえる「馬込文士村を語る」と称した講演を行い、大田区立馬込図書館で発行していた『ねんじんだより』に、野村がそれまで取り続けた写真とともに全文が掲載された。この講演をきっかけに、馬込文士村に

関する勉強会の実施について提案があり、野村を中心とした「牛追村歴史と文芸の会」というサークルも結成されるなど、「馬込文士村」の歴史が地域住民や文士たちに関心を持つ人々に広まっていった。同会では、文士たちやその作品に関する学習会や見学会等を実施し、野村の逝去後も「馬込村文芸の会」と名前を変えて平成16年(2004)ごろまで活動を行った。

野村による講演は複数回行われ、昭和58年(1983)には9月から12月にかけて12回にも及ぶ講座が開催されたほか、様々な新聞に記事が掲載された。また、昭和59年(1984)には、探訪の結果や文士たちの作品の概要をまとめた『馬込文士村の作家たち』を自費出版するなど、馬込文士村の知名度向上に大きく寄与した。

こうした活動によって馬込文士村の存在は徐々に多くの人に知られるようになり、平成元年(1989)にはJR大森駅西口に「馬込文士村案内」という大きな案内板を区が設置した。ここには馬込文士村の概要が記載されているほか、かつてこの地域に住んだ文士たちの住居があった場所が地図に記されており、現在では都営浅草線西馬込駅、大田文化の森、山王草堂記念館、大田区立郷土博物館にも同様の案内板が設置されている。案内板は1枚でも読みごたえがあり、訪れた人が案内板の前に足をとどめ、文字に目を凝らす姿が見られる。また、駅のほど近くにある天祖神社の階段脇にはレリーフが設置されており、43人の文士の顔や、馬込文士村内で行われていたというダンスパーティーの様子、流行したモダンガールの特徴を示したものなど、当時の華やかさを感じることができる。



図2-7-6 大森駅西口の「馬込文士村案内」



図2-7-7 天祖神社の階段脇のレリーフ

平成3年(1991)には産経新聞で馬込文士村をテーマとした連載が行われ、尾崎士郎や宇野千代などの文士や、画家である川端龍子や彫刻家の佐藤朝山などの芸術家の親族やゆかりのある人物が当時を振り返った記事が掲載されるなど、全国の人々が馬込文士村へ注目するようになったことがうかがえる。

また、馬込文士村を散策する人々の手助けとなるよう、大田区馬込特別出張所や大田区立郷土博物館が案内マップを発行している。馬込文士村を巡ることができる散策ルートが用意されており、マップを片手にルートを辿る人々の姿から、往時の雰囲気を感じ取れる。

さらに、馬込文士村の歴史や魅力を観光客に伝えるため、大田区立郷土博物館が主催した講習の受講者によって構成された「馬込文士村ガイドの会」が案内役となる馬込文士村周辺のガイドツアーが平成 17 年(2005)から行われ、ガイドの説明を熱心に聞きながら散策する人々の姿を見ることができ、街に刻まれた文士たちの物語を辿り、思いを馳せる様子が見られる。

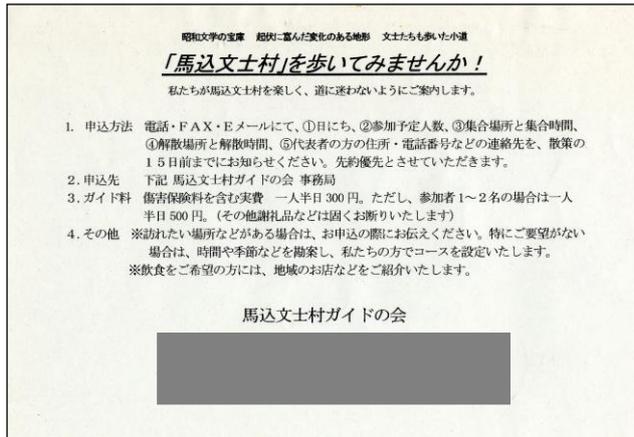


図 2-7-8 馬込文士村ガイドの会パンフレット (平成 17 年(2005))
※個人情報部分を非表示にしています。

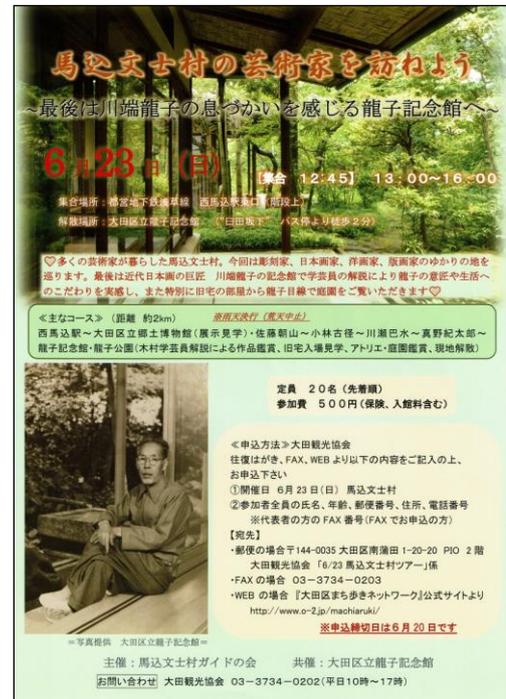


図 2-7-9 ガイドツアーのパンフレット

馬込文士村エリアにある和菓子屋では、文士たちも創作活動のひと時に食したであろう和菓子をイメージし、「文士村」を冠した和菓子が昭和 24 年(1949)頃から販売されるなど、地域住民も一体となった歴史・文化の継承活動が行われ、**日常**に馬込文士村の歴史が溶け込んでいることがわかる。



図 2-7-10 「文士村」を冠した和菓子

表 2-7-2 馬込文士村での主な活動

主な活動名	活動時期				
	～昭和 20 年 (1945)	～昭和 40 年 (1965)	～昭和 60 年 (1985)	～平成 17 年 (2005)	～令和 7 年 (2025)
野村裕 馬込文士村の探索開始	S23	→ S50 頃			
野村先生が校長を務める中 学校で上記探索結果の展示			S50●		
馬込青年館で「馬込文士村 講座」を開催			S58●		
野村先生が「馬込文士村の 作家たち」を自費出版			S59●		
レリーフ設置				●H2	
案内板、文士の解説板設置				H1 → H4	
牛追村歴史と文芸の会 (S61 に「馬込文芸の会」に改称)			S59	→	H16
馬込文士村ガイドツアー (馬込文士村ガイドの会)				H17	→
「文士村」を冠した和菓子の 販売		S24	→		

(4)まとめ

馬込文士村は、個人の探訪・調査活動を契機として、地域住民のみならず全国に知られる文化的な地域となった。作家・芸術家たちに関心を持つ人々が来訪して歴史の痕跡をたどり、かつての生活の様子や文士たちの作品に思いを馳せる姿に、この地の歴史が現在も息づいていることがうかがえる。戦災や周辺の開発により作家・芸術家たちの旧居はほとんどが取り壊され、当時の面影は薄れてしまっている。しかし、旧川端龍子邸をはじめとした残存する旧居や記念館等の建造物と、独自のアイデンティティを守ろうとする地域の人々の継承活動等により、その文化的価値は今もなお大切に受け継がれている。

このように、馬込文士村における歴史的風致は、作家・芸術家たちの旧居等の物的遺産、現在も続く地域住民による歴史・文化継承活動が一体となって構成されており、大正から昭和初期にかけての文化人の暮らしを感じさせる風情を今に伝えている。

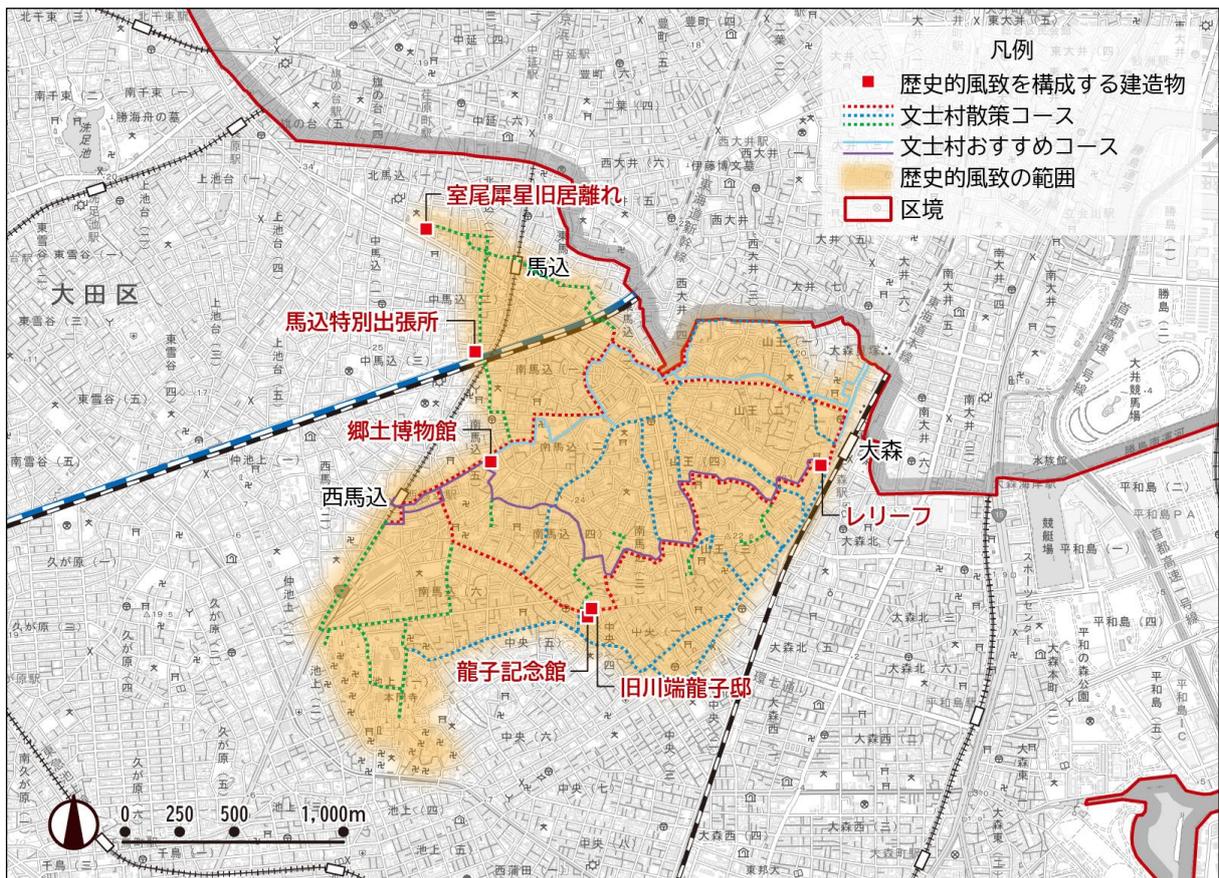


図 2-7-11 馬込文士村にみる歴史的風致の範



コラム

宇野千代

宇野千代は、山口県岩国の裕福な家に生まれ、継母と深い絆を築き、その温かさと面倒見の良さは自身の家庭環境や感情をもとに書いたとされる小説『おはん』にも反映された。

大正 10 年(1921)に短編『脂粉の顔』で文壇デビューし、恋愛や交流を通じて、詩人萩原朔太郎や小説家川端康成など文化人との多彩な人脈を築いた。モダンガールの先駆けとして断髪や流行に敏感で、馬込文士村での社交も盛んだった。代表作には、『おはん』のほかに『色ざんげ』『生きて行く私』などがある。

また、こうした文筆活動のほかに、婦人雑誌『スタイル』創刊や着物ブランド設立など実業家としても活躍した。戦後は桜模様の着物や生活雑貨を企画・製造・販売するなど事業を展開し、華やかで行動的、かつ創造力豊かな人物として、平成 8 年(1996)、98 歳でその生涯を閉じた。

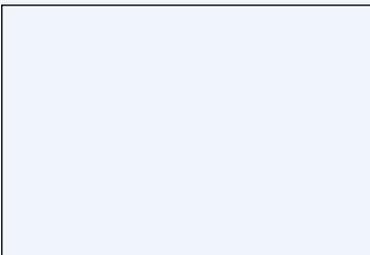


図 2-7-12

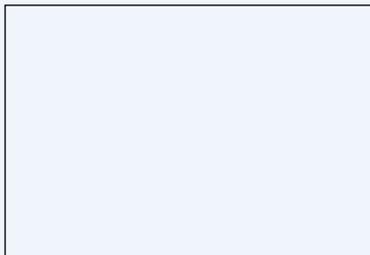


図 2-7-13

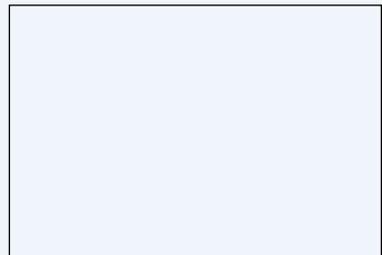


図 2-7-14